

## マルクスにおける自然認識と知識論

### 目的

カール・マルクスのテキストから、自然認識の変遷を辿り、その知識論との関係を探りたい。  
多くの先行研究は、マルクスの思想の変化を追うという問いかたをしていない。  
自然認識と科学や哲学との関係を、十分にとらえていない。

初期からのマルクスの成長を見出す視点。

フォスター (2000=2004) :

「マルクスによれば、エピクロスは自然からの疎外を発見した。しかし、ヘーゲルは人間の自分自身の労働からの疎外を、したがって社会からの疎外と、特に人間の自然への関係からの疎外を明らかにした。マルクスはこれらの洞察を、リカードウの経済学、リービッヒの化学、ダーウィンの進化論と一緒に練り上げて、あらゆる側面における疎外の止揚を至上の目標とした革命的哲学を築き上げた。彼が目指したものは、地上的な基礎の上に立つ合理的エコロジーと人間の自由の世界、つまり結合した生産者の社会であった。」<sup>398</sup>

『資本論』における完成、成長しているという認識は正しいのか？

### 方法

マルクス自身の、人間と自然の関係、認識論について話題にされているテキストを対象に検討  
学位論文とノート、『経済学・哲学手稿』、『経済学批判要綱』、『資本論』

マルクスの思想変遷について、以下の点をどうとらえているか、という視点で見たい。

1. 人間と自然の関係
2. 人間と自然を捉える認識論 (哲学、科学がどのようなあり方をしているか)
3. 人間の意識の変化、発展としての歴史

### 学位論文とノート (～1841 年)

(エピクロスの自然哲学 (原子論や時空間論、天体論など) を扱った論文と、その準備のために書かれたノート)

1. エピクロスの自然認識からの示唆

人間の感覚を、人間と自然との流動的・直接的関係として重視。

自然と人間の媒体としてのエイドーラ (映像)

「エイドーラは自然物体の形式であり、それ自身が表面としていわば自然物体からはがれ、これを現象の中へ運ぶ。事物のこれらの形式はたえず事物から流出して感官に到達し、まさにそのようにして対象を現れさせる。… (中略) …人間の感性は自然過程が一つの焦点としてそのなかで自己を反省し、燃えて現象の光となるところの、媒体である。」<sup>40:297/228<sup>1</sup></sup>

ここでは空間の変化である時間が、本質と現象の関係において重要な意味をもつ。

「現象を永遠に燃やしつくし、依存性と非本質性との刻印をおしあてる、本質の火」<sup>40:296/227</sup>

<sup>1</sup> MEW / 『マルクス=エンゲルス全集』からの引用は、巻数;原文頁/邦訳頁、と表記する。  
『経済学批判要綱』からの引用は、g 原文頁/邦訳巻数;頁、と表記する。

下線は報告者による。

「時間、すなわち、有限なものの変転は、それが変転として定立されることによって、現象を本質へと還元すると同様に、現象を本質から分離し、現象を現象として定立する、現実的な形式である。」40:295/226

理性的なものとして自然を認識。自然は対象となる。

「われわれが自然を理性的なものとして認識することによって、われわれの自然への依存はやむ。自然は、もはやわれわれの意識を恐れさせるものではない。そして、まさにエピクロスは、直接性における意識形式を、対自有を、自然の形式としている。自然が自覚的な理性によってまったく自由にされ、それ自身において理性とみなされることによってのみ、自然はまったく理性自身のものとなる。自然にたいするいっさいの関連そのものが同時にまた自然の疎外有でもある。」40:253/182-3

## 2. エピクロスの哲学原理

### マルクスの視点

「哲学者は、彼が世界と思想とにたいして与える一般的な関係のなかでは、彼の特殊な意識が実在世界に対して関わるような仕方でのみ、自己を客観化するのである。」40:274/202

感覚の客観性「具体的自然における唯一の標識」40:297/228, 説明の恣意性→哲学と現実認識の共通性

エピクロスの「説明の本質は、説明されるべき或る表象が意識の中から取り出されるということである。そして、説明あるいは詳細な規定は、同じ領域のなかから周知のものとして受けとられた諸表象がそれとの関係にあるということであり、それゆえ、説明は総じて意識という、ある決まった領域内にあるということである。ここで、エピクロスは、彼の哲学と全古代哲学との欠陥、すなわち意識のなかにはさまざまな諸表象があることを知っているが、それらの限界、それらの原理、それらの必然性を知らないという欠陥を、告白している。」40:63/54

表象の自由は恣意性として現れている。意識のあり方と自然とを同一視。

それに伴う対象化、相対化の欠如が、この哲学の弱点である。

## 3. 哲学の発達の歴史

知の進歩がヘーゲル後続学派(ヘーゲル左派)への批判の中で語られる。

ヘーゲルにとって外向きの意識だったものは、彼自身の内的本質的な意識から説明されなければならない。

「それゆえ、もし或る哲学者が実際に適合したならば、彼の弟子たちは、師自身にとって外に開かれた意識という形式をとっていたものを、師の内的な本質的な意識から明らかにしなければならない。このようにして、意識(Gewissen)の進歩として現われているものは、同時に知の進歩である。」40:326/255

哲学の実現はそれ自身矛盾を伴う。

哲学の実現はその喪失。哲学は実践において自分自身の欠陥と戦うことになる。

「世界が哲学的に成ることは同時に哲学が現世的に成ることであるということ。哲学の実現は同時にその喪失であること。哲学が外部に向かって打ち勝とうと努めるのは哲学自身の内的欠陥であること。まさにこのたまたかにおいて哲学自身は、その欠陥と同じ損傷に陥るのであり、しかも、哲学はこの損傷に陥ることによってはじめてその損傷を揚棄するということ。」40:328/256

考察:

- ・ 自然と人間は、直接的相互関係にあり、実在のものであることを示している。時空間が流動的である。
- ・ ここでは人間の能動性と受動性の境目があいまいとなっている。  
→エピクロスにおける感覚の客観性であり、エピクロス哲学の恣意性(人間の意識も自然現象)でもある。

「エピクロスらの自然の本質はまた、彼の現実的な自己意識の本質でもある。」40:247/178

一方で、人間が自然の内部存在であることが強調される。 自然物としての人間。

→ 哲学理論と自然認識の直接的関係 (素朴ではあるが)

- ・ 古代ギリシア哲学やヘーゲル左派の弱点として、マルクスが示しているのは、理論の対象化、相対化の欠如。
- ・ 人間の意識の進歩は、哲学の実現、進化として現れる

## 経済学・哲学手稿 (1844年)

1. 自然と人間の関係は、人間と動物の類的差異から語られる。

人間は非有機的自然によって生きる類存在である点で動物と共通。

人間と自然の関係は、自然と自然との関係。

「類生活は人間の場合でも獣の場合でも、肉体的の一つには、人間が(獣と同じように)非有機的自然によって生きる点にある…(中略)…自然は人間の非有機的な体である。つまり、それ自体が人間の身体なのではないかぎりでの自然はそうなのである。…(中略)…人間の肉体的および精神的的生活が自然と繋がっていることは、自然が自然自身と繋がっていることを意味するものにほかならない。というのも人間は自然の一部だからである。」40:515-6/436

人間と動物とを区別するもの…意識的な生命活動(人間が自身の生命活動と一体ではないということ)

「獣はそれの生命活動と直接の一つである。…(中略)…人間は彼の生命活動そのものを彼の意志および彼の意識の対象たらしめる。…(中略)…意識的な生命活動は人間を直接に動物的生命活動から区別する。」40:516/437

「動物はただそれ自身のみを生産するのに対して、人間は全自然を再生産する。」40:517/437

対象的世界、非有機的自然を加工することが、人間の特徴

疎外された労働は、人間から自然を疎外し、類を疎外する

「したがって、疎外された労働は人間から彼の生産の対象をもぎ離すことによって、彼から彼の類生活、彼の現実的な類的対象性をもぎ離して、彼の動物に対する長所を、彼の非有機的な体である自然が彼から取り上げられるという短所へ変える。」40:517/438

人間と自然の疎外された関係は、社会を通して乗り越えられる。

社会と人間との関係も、自然と同じように相互的。

「社会そのものが人間を人間として生み出すように、社会もまた人間によって生み出されているのである。…(中略)…自然の人間的な本質は社会的な人間にとってこそ始めて存在する。というのは、ここでこそ始めて自然は人間にとって人間との絆として存在し、他者にとっての彼の、および彼にとっての他者の存在として存在し、また人間的現実の生命的な要素として存在するのだからであり、ここでこそ始めてそれは彼自身の人間的存在の基礎として存在するのだからである。…(中略)…このようにして社会は人間と自然との本質的一体性の成就、自然の真の復活、人間のナチュラリズムの遂行また自然のヒューマニズムの遂行である。」40:537-8/458-9

これは私的所有のポジティブな廃止によって実現。

私的所有一持つことのセンス。私的所有の止揚はセンスの解放

「それ故に私的所有の止揚はあらゆる人間的なセンスと特性の完全な解放である。しかしそれがこの解放であるゆえんは、これらのセンスと特性が主体的にも客体的にも人間的になったところにこそある。」40:540/461

「直接的諸器官のほかに社会的な諸器官が社会の形式において生じる…」 同上

センスは個人の感覚の範疇を超えた社会的なものとして認識される。

## 2. 人間の感性を基にした自然科学のあり方

学問は感性から、自然から出発する必要がある

「感性があらゆる学問の土台でなければならない。ただ感性、それも感性的意識ならびに感性的欲求という二重の形態における感性から出発する場合にのみ——すなわち自然から出発する場合にのみ——、学問は現実的な学問なのである。」 40:543/464-5

人間は自然科学の直接の対象→自然を対象とすることで自らの対象的現実化を見出しうる。

「人間は自然科学の直接の対象である。なぜなら、人間にとっての直接的な感性的自然は人間的感性であり(これは同じことの表現である)、直接的にはそれは感性的に彼にとって現存する、彼とは別の人間として存在するのだからである。…(中略)…しかし自然は人間にかんする学問の直接の対象である。人間の第一の対象——人間——は自然、感性であり、特殊な人間的感性的な本質諸力は、ただ自然的諸対象においてのみ自らの対象的実現を見出しうるように、ただ自然物一般の学問においてのみ自らの自己認識を見出しうる。」 40:544/465

## 3. 人間の形成としての歴史

歴史…人間の生成の自然史

「全歴史は、『人間』が感性的意識の対象となり、そして『人間としての人間』の欲求が欲求とならんがための準備—発展史である。歴史そのものは自然史の、自然の人間への生成の、一つの現実的な部分である。」 40:544/465

歴史観…進行とともに循環がある。無目的。生成を語ることの矛盾

「お前は、その進行のなかに感性的にありありと目にみえるところの円運動、すなわち人間が生殖において己れ自身を繰り返し出し、したがって人間がいつでも主体であり続けるあり方、をもしっかりとつかんでいなければならない。…(中略)…お前が自然と人間との創造のことを問うなら、そのことでお前は人間と自然を捨象するわけである。お前は自然と人間を存在しないものとしておいて、しかもそれらを存在するものとして私に証明しろといっているのである。」 40:545/466

→究極の目標を設定することの矛盾。共産主義はゴールではない。過程、運動の動態

「次の未来の必然的形態と力動的原理だが、しかし共産主義はそれ自体が人間的発展の目標——人間的社会の形態——なのではない。」 40:546/467

考察：

- 人間の感性が、個人の感覚を超えた、社会的で可変的なものとして認識されている。

「5つのセンスの形成はこれまでの全世界史の仕事である。」 40:541/463

→社会を介し、疎外を経たものとして、人間と自然の一体性、センスが語られている。

- 人間と人間の関係、人間と自然の関係が、同じ次元で語られている。  
自然認識を通し人間を捉える学としての自然科学。
- 人間性の実現は、感覚の「違う」人間への発達である。 人間身体そのものの変化。
- 目標としてではなく動態としての共産主義

**経済学批判要綱 (Grundrisse)** (1857~8年)

1. 物質代謝・所有・労働…人間と自然の動的関係

根本的には人間と自然は一体である。なぜ分離しているのかが問題。

「生きて活動する人間と、彼らが自然との間に物質代謝をするさいの自然的・非有機的諸条件との間の統一、したがって人間による自然の領有——は説明を要することでもないし、また歴史的過程の結果でもない、むしろ人間的定在の非有機的諸条件と、この活動する定在とのあいだの分離、賃労働と資本との関係で初めて完全なものとして措定されるような分離こそが、説明を要し、また歴史的過程の結果なのである。」 g389/3;423

人間と自然の関係は、共同体を通じた人間による自然領有。所有は自然的生産条件に対する人間の関係行為。

「所有とは本源的には、自分に属するものとしての、自分のものとしての、人間固有の定在とともに前提されたものとしての自然的生産諸条件にたいする人間の関係行為のことにほかならない。すなわち自己の肉体のいわば延長をなすにすぎない、自分自身の自然的前提としてのこれら生産諸条件にたいする関係行為である」 g391/3;425

「所有とは、ある種族(共同体)へ帰属すること(そのなかで主観的・客観的存在をもつこと)であり、そしてこの共同体の、土地、その非有機的肉体である大地にたいする関係行為を媒介にしての、個人の土地にたいする関係行為、彼の個性に属する前提条件、個性の定在様式としての生産の外的な原初条件——大地は原料、用具、果実となっているから——にたいする関係行為のことである。」 g3;392/426

人間の手を通る自然素材の無常性としての労働。その動態は生産、消費の形態をとる。

「労働は、生きて物を形作る火であり、生きた時間による物の形成としては、物の無常性であり、その一時性である。」 g266/2;285

「…素材の消費とその形態の止揚とが人間の享受となり、その変化がその使用それ自体であるところの形態を受け取ることになる。」 同

2. 科学の役割：富の発展のための有用性

科学の発展は、「人間の生産力の発展すなわち富の発展が現れるところの一側面、一形態にすぎない。」 g3;439/477  
自然が純粋な有用物となる「資本の偉大な文明化作用」。科学は人間の欲望に従属させる為の策略

「地球上のあらゆる方面を探検して、新しい有用な対象を発見するとともに、またもとからの対象の新しい使用性質を発見し、またその原料等としての新しい特質を発見すること。したがって自然科学をその極点まで発展させること。」 g312/2;337

「自然は、はじめて人間にとっての純粋な対象、純粋な有用物となり、対自的な力とはみとめられなくなる。そして自然の自立的な法則を理論的に認識することは、消費の対象としての自然にせよ、人間の欲望に自然に従属させるための策略にすぎないものとさえ見られる。」 g313/2;338

「生産に科学的性格を与えるのは資本の傾向」 g3;587/647.機械においてそれがよくあらわれる。

機械は「自然を支配する人間の意志の器官、または自然における人間の意志の実証の器官に転化されている天然の材料である。それらは人間の手によって造り出された人間の頭脳の器官、対象化された知力である。」 g594/3;655

3. 人間の欲望、生産力の発達

人間の必要の変化

資本の傾向：「かつては不必要であったものの、必要なものへの、歴史的につくりだされた必要性への変化」 g426/3;464

## 過程としての人間(と自然)の歴史

「彼自身の歴史を一つの過程として理解し、また(同様に彼にたいする実践的な力として現存する)自然を彼の現実的肉体として知ること、発展の過程そのものは、過程の前提として措定され、意識されている。だがそれには、生産力の十分な発展が生産諸条件となっており、一定の生産諸条件が生産力の発展にたいする限界として措定されていないということが、なによりも必要である。」 g440/3;478-9

### 考察:

- ・ 自然と人間の関係については、その相互性が主張されているものの、所有関係(人間と自然の関係行為としての)が中心であり、生産諸条件という文脈にのみ置かれている。  
その関係は社会を介している。人間は共同体成員である。
- ・ 科学は有用性のある知識発展、資本の発展に伴い「文明化」し、自然は純粋な対象となる。
- ・ 自然は利用の対象となり、科学は生産力発展の中に埋め込まれる。それは機械においてよく現れている。
- ・ 人間の必要の変化の歴史、生産力の発展。

## 資本論 (1867年)

### 1. 自然と人間の間をとりえる概念としての労働、自然としての資本主義

労働:「自然と人間の間の一過程」であり、人間による、人間と自然の物質代謝の媒介・規制・制御

自然に働きかけてそれを変化させる、同時に自分自身の自然を変化させる

「彼は、自然的なものの形態変化を引き起こすだけではない。彼は、自然的なものの中に、同時に彼の目的を実現するのである。」 23;193/234

労働の普遍性。人間の、すべての社会形態から独立した存在条件。

「人間と自然の物質代謝を、したがって人間の生活を媒介するための、永遠の自然必然性」

人間は、「素材の形態を変えることができるだけである。」

労働そのものも、「自然力に支えられている」 23;57/58

どのようにしてその過程を制御するか?

労働者が直接支配するのは、労働対象ではなく労働手段

自然物が、人間の肉体器官につけ加えて、「自然の姿を引き延ばす」 23;194/235

「何が」ではなく、「どのようにして」つくられるかが、いろいろな経済的時代を区別

——労働手段は、人間労働力発達の実定器であり、労働の社会的諸関係の表示器 23;195/235-6

資本主義が自然過程となってゆく

- ・ 協業において労働者は有機体の一部ようになる「全体労働者」

「全体労働者の器官であるということだけで、つまりその部分機能のどれか一つを果たすということだけで、十分である」 23;531/660

→労働の社会化が生み出す人間の浪費。

「生きている労働の浪費者であり、肉や血の浪費者であるだけでなく神経や脳の浪費者でもある。」

労働者の生命や健康の浪費を生み出すのは、労働の「直接に社会的な性格」 25;99/111-2

## 2. 科学の役割：自然力の生産力への利用

### ・ 労働手段としての機械

「人力のかわりに自然力を利用し経験的熟練のかわりに自然科学の意識的応用に頼ることを必然的にするよ  
うな物質的存在様式」 23;407/503

### ・ 土地の豊度は機械や科学の発展により変化する 25;839-40

「豊度は、土地の客体的属性であるとはいえ、経済的にはつねに関係を、すなわち農業の与えられた化学的  
および機械的発展状態にたいする関係を含んでいるのであり、したがってこの発展状態につれて変化するの  
である。」 25;664/839-40

## 3. 歴史観：欲望と生産力の発達としての人間発達、目標としての共産主義

物質代謝の合理的規制が、中間目標として設定される。

「自由はこの領域のなかではただ次のことにありうるだけである。すなわち、社会化された人間、結合された  
生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることを  
やめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の  
消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行うということ  
である。しかし、これはやはりまだ必然性の国である。この国のかなたで、自己目的として認められる人間の  
力の発展が、真の自由の国が、始まるのであるが、しかし、それはただかの必然性の国をその基礎としてその  
上のみ花を開くことができるのである。」 25;828/1051

それは人間の計画的制御を目指すもの。そのための物質的条件。

「社会的生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿は、それが自由に社会化された人間の所産として人間の意  
識的計画的な制御のもとにおかれたとき、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎ捨てるのである。しかし、その  
ためには、社会の物質的基礎または一連の物質的存在条件が必要であり、この条件そのものがまた一つの長い  
苦悩にみちた発展史の自然発生的な所産なのである。」 23;94/106

## 考察

- ・ 自然と人間の関係は、人間による目的意識的な労働と、そのために利用する資源としての自然という側面が前面  
に押し出されている。(労働手段、材料としての自然)
- ・ 生産力発展のための利用。人間が利用する自然は、科学知+技術によって変わってくる。
- ・ 資本主義生産様式が自然過程として現れる→ゴールとしての、自然力の共同的統制。

## 結論

人間と自然の関係について：直接的相互関係にある点において、どの時点も共通。

自然との感性的関係にある人間。感性的関係は直接の関係を示す。

→自然とのかかわりの中で、自然を作り替えていく人間。

疎外は人間の類的な特徴の結果であり、社会によって乗り越えられる

→自然を所有する人間。共同体を通して、生産条件としての自然と関わる

労働：自然素材が人間の手を通り無常性を示す。消費と生産の直接のつながり

→労働が人間と自然の関係の一形態であり、時代を超えた普遍性をもつ。

社会システムが(必然性としての)自然のように作用していく。資源としての自然認識

人間の感性(自然から受け取ること)から、人間の自然への働きかけが軸となる。

知識のあり方, 役割について: 大きな変化.

自然としての人間の働き, 哲学の現世での実現

→ 科学の役割: 自然を対象にすることによる人間認識

→ 自然を有用物にする, 生産を科学的にする役割, その結果としての機械

→ 自然を生産力に利用する手段, テクノロジー発展との強いかかわり

有用性, 実学としての科学へ, 技術との区別がつきにくくなっている

人間の意識の発達: 人間自身の変化や発展が対象化されているという点で共通

知の進歩, 現実との関係における哲学の矛盾, 認識論レベルでの変化

→ 人間のセンスの発達, それは社会的である, 力動原理としての共産主義

→ 欲求とそれを満たす力の発達, 一定の生産力がそれ以後の前提条件になる

→ 物質代謝を共同的統制に置くという目標に向かう共産主義

社会化された人間の意識的計画のもとにおくことが目指される.

- ・ 自然との(内部的)一体性から, 資源利用のための自然観への変化.
- ・ 学問が自然を捉える(それによって人間自身も捉える)ための認識枠組みから, 資本の論理に利用される資本としての知へ.
- ・ 歴史の動態認識から, 目標設定へ.

この変化は資本主義生産様式への視野の限定によるものか, マルクス自身の自然観が変化したものか.

## 文献

- ・ Foster John Bellamy, 2000, *Marx's Ecology: Materialism and Nature*, New York: Monthly Review Press. (=2004, 渡辺景子訳『マルクスのエコロジー』こぶし書房.)
- ・ Marx, Karl, 1962, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, *Karl Marx - Friedrich Engels: Werke, Band 23*, Berlin: Dietz Verlag. (=1965, 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集』23巻, 大月書店.)
- ・ ———, 1964, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, *Karl Marx - Friedrich Engels: Werke, Band 25*, Berlin: Dietz Verlag. (=1967, 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集』25巻, 大月書店.)
- ・ ———, 1973, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, *Karl Marx - Friedrich Engels: Werke, Ergänzungsband Erster Teil*, Berlin: Dietz Verlag. (=1975, 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集』40巻, 大月書店.)
- ・ ———, 1953, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie. (Rohentwurf) 1857-1858, Anhang 1850-1859*, Berlin: Dietz Verlag. (=1958-65, 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱(草案)』, 大月書店.)